

そ こ が 知 り た い

医 薬 ? 情 報

糖尿病にまつわる医療用語の見直しについて

皆さんは「糖尿病」ということばに対してどのようなイメージや印象をお持ちだろうか。患者の立場からまたは医療者の立場からなど各々の立場で変わってくるかと思われる。

日本糖尿病協会が行った糖尿病患者1087人に対するインターネット調査では約9割が糖尿病という名称について何らかの抵抗感・不快感を持ち、名称変更を希望する人が8割に上ったという結果であった。その理由として「排せつ物の名前が入っている」「怠惰、自己責任、不摂生、ぜいたく病といった悪いイメージがある」などが挙げられている。病名をめぐっては2002年に精神分裂病が統合失調症に、2006年に痴呆が認知症に変更された例がある。

このような中、2022年11月に日本糖尿病協会より糖尿病にまつわる医療用語を見直す提言が発表された。同協会によれば、糖尿病に対する誤った認識(ことば)が社会的偏見を助長することが多く、病態を正確に表していない病名や、糖尿病医療で無意識に使われる不適切なことばの使用により、糖尿病のある人は社会から負の烙印(スティグマ)を押されている。また古い疫学データに基づく判断により、生命保険や住宅ローンなどの必要なサービスが受けられない、就職や昇進に影響するなどといった不利益を被るケースが報告されているとも指摘している。そこで同協会は、まずは医療現場で習慣的に使用されていることばの中でスティグマが生じうる用語を医療者に認識してもらい、糖尿病のある人に配慮したことばの使用推進活動を展開し、将来的には「糖尿病」の名称変更の議論につなげるとともに、社会全体の糖尿病に対するスティグマ払拭を目指す考えである。スティグマを生じやすい糖尿病医療用語と

代替案の具体例(一部)を以下に示す。

- ・「糖尿」⇒「糖尿病」
- ・「糖尿病患者」⇒「糖尿病のある人」
- ・「療養指導」⇒「支援, サポートなど」
- ・「血糖コントロール」⇒「血糖管理, マネジメント」

これらはどれもわれわれが普段、医療現場で用いているものであり、侮辱的なニュアンスを含む表現や現在の疾患概念にそぐわないなどが理由として挙げられている。

一方、医療関連情報提供サービス会社(エムスリー社)の会員を対象とした調査によると異なる意見が多い結果となった。医師914人を対象とした意識調査では、「糖尿病の名称に対してネガティブな影響を感じるか?」という問いに対してほとんどの診療科で「あまり感じない」「全く感じない」が過半数を占めていた。糖尿病の名称変更については15診療科中14診療科で「反対」の割合が「賛成」の割合を上回っており、「わからない」という回答も全体の3割弱を占めていた。また「糖尿病の名称を変えらしたら」という問いに対しては「現在のままで良い」という意見が多かった一方、「高血糖症」や「糖代謝異常症」など幅広い診療科から多くの案が寄せられた。

実際に糖尿病の名称を変えるには関連学会や厚生労働省などとの長期にわたる議論が必要となってくる。現在、日本糖尿病協会ならびに日本糖尿病学会はアドボカシー(権利擁護)活動として、糖尿病を正しく理解し、偏見が生まれる環境を変えるさまざまな活動を展開している。一度ついてしまったイメージを変えるのはなかなか難しいが、ことばが変わると同時に大切なのはこうした活動をもとに糖尿病に対する正しい知識を継続して社会に発信してい

くことではないであろうか。

《参考資料》

・日本糖尿病協会ホームページ 2022年2月13日アクセス



・エムスリー株式会社：m3.com 意識調査 2022年2月13日アクセス



(日本赤十字社医療センター薬剤部

田尻 優吏亜)